

# 延慶本『平家物語』の成親説話考（上）

——怨霊譚を中心に——

朴 恩 姫

## 一、はじめに

『平家物語』には、清盛や頼朝、後白河院などたくさんの歴史的な実在人物が登場する。彼らには実像とは別に、虚構を通して物語的に作られた虚構の像がある。歴史上の人物は、その人が実際もっていたある一面を誇張したり、捨象したり、まったくの虚構を加えたりする過程を通じてはじめて物語の登場人物になるのである。その人物を英雄化するか、矮小化するかは、まさに作者（編集者）の意図によるものである。したがって、一人の人物の造型を分析することは、『平家物語』という作品を理解する上で有効な方法だといえる。

本稿で分析の対象としようとしている藤原成親という人物もまさにこのような虚構化の過程を経て、われわれの前に現れている。成親が主に関わっている鹿谷陰謀事件は、平家の全盛期、平家政権を転覆しようと院近臣が中心になって目論んだ反平家運動で、『平家物語』では陰謀の原因や事件の推移がかなりの叙述量で詳しく語られている。陰謀自体は、多田藏人行綱とい

う味方の裏切りによって、事前に清盛に知らされ、関係者処罰というふうにおさまるが、その影響は以後以仁王や頼朝の挙兵にも及んでいるといえる。その鹿谷陰謀の主謀者として登場しているのが、藤原成親である。

では、『平家物語』のなかで成親はどういうふうに着構化されているのか。この問題と関連して先行研究でもっともよく取り上げられているのは、いわゆる左大将争いであろう。成親が平家に反感を抱くきっかけになったと語られている左大将争いが、物語的な虚構であることはほぼ通説になっている。特に曾我良成は緻密な史料の分析を通して、当時成親が左大将に成りうる可能性を全面的に否定している。また早川厚一によって左大将争いの虚構がもっている物語内の意味を、鹿谷事件説話群のレベルではなく、『平家物語』の全体の構想のなかで捉えようとする試みもなされている。

本稿では、左大将の争いの虚構の意味を含めて、歴史的な実在人物である成親が物語のなかでどのように虚構化されているのか、あるいは成親のどのような面が強調されているのかに焦点をしばり、成親人物造型の特徴を考えてみたい。成親の人物

造型を分析するにあたって、方法としてまず先行研究であまり論じられていない怨霊としての成親に着目したい。なぜならば、左大将争いや鹿谷陰謀といった目に見える〈顛〉の世界だけでは、『平家物語』に語られている成親を全的にとらえることができないし、怨霊としての成親といった〈冥〉の世界をも視野に入れることによって、この〈冥〉と〈顛〉の両者があいまっではじめて妥当な成親造型も可能になると考えられるし、そのことと関連して鹿谷事件を『平家物語』の構想の中に正しく位置づけることができると思われるからである。

しかし成親造型を〈冥〉と〈顛〉の両面にわたって分析しようとしても、紙幅の関係から一つの論文にまとめることは難しい。そこで本稿では主に〈冥〉においての成親について考察し、〈顛〉における成親については別稿「延慶本『平家物語』成親説話考(下)」を用意して考察したいと考えている。

## 二、成親の怨霊

『平家物語』が平家の栄華専横と滅びを描いている作品であるにも関わらず、平氏の怨霊や平氏に恨みをもつ怨霊の登場が意外と少ないということは春田宣の指摘通りである。その少ない例の一つとして登場するのが成親の怨霊である。彼の死についての叙述は諸本様々であるが、延慶本によると、成親は清盛の腹心である経遠が予め用意した穴に落ち、菱(刺股の一種)に貫かれ、埋められたという。このようなかたちで伝えられる有本別所での成親の死という出来事は都の情報圏からは漏れてい

るためか、死の真相とはかけ離れた様々な噂が生まれ、『平家物語』の諸本や『愚管抄』などに見える多様な叙述が出来上がったと思われる。延慶本はこのような成親の死についての当時の噂を、都での風聞という形でまとめて次のように語っている。

其最後ノ有様モ都ニハサマ／＼ニ聞ケリ。歎ノ日数積テ、ヤセ衰テ思死ニ死給タリトモ聞ユ。又酒ニ毒ヲ入テス、メ奉リタリトモ沙汰シ、又ラキニ漕出テ海へ入奉リタリトモ申シケリ。(二〇四頁)

この叙述によれば、あまりの家族の恋しさに一種の神経衰弱にかかって死んだ、海の中に入れられて死んだ、毒の入った酒を飲んで死んだなど、様々な噂が当時都に伝わっていたことになるが、このような様々な噂の存在から都人が成親の死についてどれほど強い関心をもっていたかを読みとることができる。

もう一つ、成親の死についての噂の記事で読みとるべきことは、いずれも死に様の異常さが強調されているということである。つまり前掲の叙述から浮かび上がる思い死にや溺死、毒殺というのは、誰かによって殺される、または執念をもったまま死ぬということで、いずれも正常な死に方だとはいえない。大納言という社会的に高い地位を占めている貴族が配流され、都から離れた辺鄙なところで怨念をもったまま非業の死を遂げるというところに都の人々は成親の怨霊としての発現の危惧を感じていたことを引用から読みとることができる。左大將ポストをめぐつての執着という物語の虚構から作り上げられた成親の

執念深い性格まで考慮すると、彼の怨霊としての物語再登場の可能性はますます高まるのである。

都の風聞から読みとれる怨霊としての発現の危惧は、成親の死後何日も経たないうちに遠流の身にある成親の世話と管理をしていた経遠の娘の死という形で実現される。

不思議ナリケル事ハ、経遠方最愛ノ娘二人アリ。七月下旬ノ比ヨリ一度ニ病付テ、ハテニハ物ニ狂テ、竹ノ中へ走入テ、竹ノ切クヒニタウレ懸リテ、ツラヌカレテ、二人ナガラ一度ニ死ニケリ。忽ニ報ニケルコソオソロシケレ。

#### (二〇四頁)

成親の怨霊は、まず清盛の命令にしたがって自分を殺した経遠の娘に祟ったのである。狂気に落ちた経遠の娘たちは竹林に駆け込み、竹の切り株に貫かれて死んだが、竹の切り株という先端の尖ったものに貫かれ死ぬということから、成親の怨霊の仕業であることを読みとることができる。尖っている竹の切り株と菱の共通性から成親を連想するのはさほど難しいことではない。成親の死は七月十九日と記されているので、七月下旬というのは、死後まもない時期であるということになり、直ちに祟るということから成親の怨念の強烈さが読みとれる。

延慶本には同じ死に様をとおして怨霊の発動を暗示しているもう一つの例がある。藤原頼長と信西のいわゆる首実検のことがそれである。延慶本は頼長の首実検について諸本より詳しく描写し、信西の異常な死について「此ノ報ニヤ、信西平治ノ最

後ノ有様、少モタガハザリキ」と語り、それが頼長の怨霊によるものであることを暗示している。経遠の娘の場合貫かれて死ぬという共通性で成親の怨霊の仕業であることを暗示しているように、頼長と信西も首実検という共通モチーフをもって怨霊の祟りであることを暗示しているのである。

経遠の娘の死についての記事は延慶本のほかにも、長門本、源平闘諍録、源平盛衰記にもみえるが、延慶本では成親の祟りをうける人を経遠の娘と設定しているのに対して、他の本では成親の介錯をしていた智明の娘になっている。特に注目すべきなのは長門本で、智明の娘の怪死の後に、もう一つの怨霊譚、つまり成親が経遠に祟ろうとしたことについて語られていることである。成親が死んで九日経ったある日、にわかに空がくもって雨が降りだし、雷が鳴り響くなか、成親の怨霊が現れ、自分の菩提の途を妨げたことに遺憾の気持ちを持つが、それに対して経遠は、主君の命令に従っただけで自分には誤りがないと答え、成親の怨霊を納得させようとするのである。成親の怨霊に雷神的な性格を付与していることや、難波次郎経遠の「文武二道のをこ」としての造型などについては先行研究がなされているが、<sup>4</sup>成親が説得されてしまうことで怨霊譚的な性格が薄くなっているもの、成親怨霊譚の一つの可能性を示している事だけは、注目する必要があるだろう。

有木別所で死んだ成親は経遠の娘に祟った後、とうとう都に進出、かつて自分を遠流に処した怨敵である清盛の娘に祟ろうとする。いわゆる建礼門院の着帯や御産の場に現れたのがそれである。

カ、リシ御惱ノ折節ニ合テ、シウネキ物氣、度々取付奉ル。  
有驗僧共アマタ被召テ、護身加持障モナシ。ヨリマシ明王  
ノ縛ニカケテ、サマ／＼ノ物氣顯タリ。總テハ讃岐院ノ御  
怨靈、別ハ悪左府ノ御憶念、成親卿、西光法師ガ怨靈、丹  
波少將成経、判官入道康頼、法勝寺執行俊寛ナムドガ生靈  
ナムドモ占申ケリ。

(三三四頁)

治承二年六月二十八日の着帯後、中宮の調子があまりよくな  
かつたので、護身加持がひきりなく行われるが、ある日よりま  
しを不動明王の縛にかけて見たところ、様々な物の怪が中宮の  
身に取り付いていることが分かる。讃岐院や頼長は保元の乱の  
敗者であり、成親卿、西光法師、成経、康頼、俊寛は、鹿谷事  
件関係者で、清盛によって死んだり配流された人々である。

建礼門院の懷妊の記事は諸本に共通してみえる記事である  
が、登場する怨靈は諸本によって少しずつ違う。長門本は延慶  
本と同じく崇徳院、頼長、成親、康頼、成経、俊寛が登場し、  
四部本は成親と成経の物の怪が、源平盛衰記には成親父子、俊  
寛、康頼が、寛一本では崇徳院、頼長、成親、西光、鬼界島の  
流人たちが登場する。諸本によって差異はあるものの、メイ  
ンになっているのは、やはり鹿谷事件の敗北者である。特に四部  
本のように成親と成経だけが登場する本が存在することや、右  
の引用を受けて門脇宰相教盛が成親の怨靈を鎮めるためには成  
経を赦免するに越したことはない<sup>5</sup>と重盛に嘆願する記事が続く  
ことなどから、右の怨靈譚の主役は成親だといえる。成親は鹿

谷事件により死んだり遠流された人々の代表者として清盛の娘  
に祟ろうとしており、それは生前鹿谷陰謀事件の主謀者として  
の性格の反映でもある。また右の引用で注目すべきことは、崇  
徳院と頼長といった、一昔前の保元の乱の敗者たちが現れると  
いうことであるが、この問題については次節で詳しく考察する  
ことにする。

成親の二つの怨靈譚で祟られるのは、怨念の対象たる経遠と  
清盛ではなく、その娘たちである。恨みの相手だけではなく、  
その血筋に祟るというところに成親怨靈譚の特徴があるといえ  
るが、これは王朝怨靈譚の基本パターンだともいえる。当時の  
怨靈観を知るために、慈円の『愚管抄』の有名な例を見てみよ  
う。

フカク世ヲミルニハ、讃岐院、知足院ドノ、靈ノサタノナ  
クテ、タマ我家ヲウシナハント云事ニテ、(中略)コノイ  
殿ノタビ／＼トラレ給ヒテ、今マデ命ライケテアソビテコ  
ノ家ヲウシナハレスル事ト、後白河院一代アケクレ事ニア  
ハセ給フコトナドハ、アラタニコノ怨靈モ何モタマ道理ヲ  
ウル方ノコタウル事ニテ侍ナリ。

慈円は保元の乱の敗者である崇徳院と忠実の怨靈についてふ  
れ、忠実の怨靈が摂関家を脅かし、崇徳院の怨靈は後白河院を  
度々の災難に遭わせるなどしていると語っているが、後白河院  
は天皇家の家長の位置にあるともいえる。慈円の考えの大事な  
ところは、政治の敗者の怨靈は政敵自身に対してだけではなく、

その血筋をたどって祟ると言うことである。つまり怨霊の概念の中核にあるものは家の血筋と関わるということである。このような慈円の怨霊観は、慈円固有の概念ではなく、王朝期以来の怨霊観を言説化したものとみることができ。

ところで、延慶本では、成親の怨霊の登場後、「讃岐院之御事」「西行讃岐院ノ墓所ニ詣ル事」「宇治ノ悪左府贈官等ノ事」「三条院ノ御事」のように、しばらく怨霊の発現や慰撫に関する逸話が長く続く。このような崇徳院や頼長の怨霊についての話は、実は慈円の怨霊観とは少し異なる成親の怨霊の性格を考へる際重要な鍵になると思われるので、まず崇徳院や頼長関連記事を分析し、延慶本の怨霊観をさぐり、そのなかでの成親の怨霊の特性について考えてみよう。

### 三、崇徳院と頼長

讃岐院の追号や頼長の贈官贈位についてふれている「讃岐院之御事」や「宇治ノ悪左府贈官等ノ事」の記事は、それぞれ二九日（安元三年七月）、八月三日という日付から始まり編年体の形式をとっているが、内容的にはいずれも怨霊の発現や慰撫について語り、成親の怨霊の発現譚を引き受けているといえる。延慶本第一末は周知のように、鹿谷事件の首謀者である成親の死とその怨霊の発動、讃岐院追号と頼長の贈官贈位、彗星の出現をもって終わっている。鹿谷事件によって死んだ成親が怨霊になって祟り、讃岐院や頼長の追号や贈官贈位の慰撫の行事にも関わらず彗星が現れるなどして、人々は「又イカナル事ノ有

ムズルヤラム」と嘆き、治承二年を不安におののきながら迎えるのである。

「讃岐院之御事」「西行讃岐院ノ墓所ニ詣ル事」「宇治ノ悪左府贈官等ノ事」の三つの記事は、保元の乱の経緯や結果としての崇徳院や頼長の怨霊化について語っている。「讃岐院之御事」に記されている讃岐院関連叙述は『保元物語』などにも見える記事ではあるが、延慶本は特に讃岐院の流される心境が他の『平家物語』の諸本に比べて比較的長く語られている。讃岐までの長い道程を帝王の座にあった昔と罪人になって遠流される今を対照的に描いているこの道行文的な記述は、成親の児嶋までの道程を連想させる。これらはいずれも都から遠く離れた辺境に赴いていくことを確認させる叙述である。さらに一の宮重仁親王の安否に気をもみ、いつも都に心を馳せるところからも、成経や都の家族を気にする成親がオーバーラップされる。このように配流された崇徳院と成親のイメージが類似性をもつて造型されているのは、崇徳院と成親が政治の戦いに敗れ配流され、怨念をもったまま、都ではない讃岐志度の道場と備中の有木の別所で死んだという共通性から派生されたものであろう。そのことで注目すべきことは、讃岐と備中は両方とも五畿内に入らない周縁にあたり、崇徳院も成親もいわば都の周縁で怨霊として発動し、中央の秩序を脅かす存在となつて都に祟りをもたらそうとしているという構造をもっていることである。この怨霊と周縁性の結びつきは、頼長関係叙述にも強調されている。頼長は奈良坂般若野の五三昧に埋葬されるが、そこから怨霊になつて都を襲い、平治の乱に信西に祟つたのである。ここにま

ず『平家物語』の怨霊の特性を認めてよからう。

『平家物語』の怨霊観のもう一つの特性、しかも前代の怨霊観では説明できない特性が「宇治ノ悪左府贈官等ノ事」のなかの次の一節に見えている。

思ノ外ナル事共アリテ世間モ静ナラズ・「非是直事。偏ニ怨霊ノ至ス所ナリ」ト人々被申ケレバ、加様ニ被行ケリ・

(二二二頁)

引用は、崇徳院・頼長怨霊譚の締めくくりの部分で、御追号や贈官贈位が行われた背景を語っている部分である。「思ノ外ナル事共」というのは、言うまでもなく山門騒動から鹿谷事件までの一連の事件を指し、この引用からは崇徳院と頼長の怨霊が政治的な危機をもたらしているという都人の不安感を読み取ることが出来る。このように崇徳院と頼長の怨霊と当時の政治状況を結びつけ、追号や贈官贈位の慰撫行事の意義を説明しているのは、延慶本だけではない。たとえば、『百鍊抄』の安元三年七月二十九日の記事にも類似する表現が見られる。

保元の乱で死んだ敗者たちの怨霊が、安元三年に至るまで鎮まることなく、世間を騒がし、世の中を危機に陥れようとするのは、前節でみた慈円の怨霊観での怨霊の働きとは次元を異にする。慈円に代表される王朝の怨霊観というものは、もともと政治的なおもむきに基づく婚姻関係によつて家系が複雑に絡み合っていた王朝貴族社会、言い換えれば政治的対立が個人による一対一の対立ではなく、個人を埋め込んだ家系（家の血筋）

の対立・葛藤を意味する社会構造の中で生まれたものである。しかし保元の乱で貴族社会内部の秩序全体にわたって分裂が起き、天皇家、摂関家という体制の最上部にも深刻な分裂が生まれるようになった。この深刻な貴族社会の分裂に決着をつけたのは、当時貴族社会にとっては「外部」ともいべき、鄙（地方）に台頭してきた武家であった。政治的な対立を貴族社会の「内部」の家系同士の葛藤として説明することはもはやできなくなってしまったのである。武家という「外部」の存在が「内部」の対立に介入することによって、結果的に「外部」が貴族社会とその体制秩序に挑みかかるという、これまでになかった二元的な対立構造が現れたのである。

このような社会の大きな変化は従来の怨霊観にも影響を及ぼすことになる。摂関家や天皇家といった家の対立と分裂、あるいは地方の武家の登場などにより、怨霊の觀念は貴族社会内部の家系対立のなかではもはやとらえることはできなくなった。血筋（家系）に祟る従来の怨霊に代わって、『百鍊抄』や延慶本に見えるような血筋（家系）を超えて、世の中（国政）を危機的状况に陥れようとする崇徳院・頼長の怨霊が現れたのである。慈円が摂関家という自分の出自にかかわるためか、為政に責任をもつ家柄として従来の怨霊観を継承しているのに対して、延慶本や『百鍊抄』は新しい怨霊観を示しているといえる。

その点からみて崇徳院記事で注目しなければならないのは、五部の大乗経に関する叙述である。崇徳院は書写した五部の大乗経を都に近い鳥羽・八幡の辺りに置くことを希望したが、信西によって果たすことが出来なかった。

御経ヲ御前ニ積置テ、御舌ノサキラクヒキラセ給テ、其血ヲ以テ、軸ノ本毎ニ御誓状ヲゾアソバシケル。「吾此ノ五部ノ大乘経を三惡道ニ投籠テ、此大善根ノ力ヲ以テ、日本國ヲ滅ス大魔縁トナラム。天衆血類必ズ合力給ヘ」ト誓ハセ給テ、海底ニ入レサセ給ニケリ。

(二〇七頁)

引用の中にある「大魔縁」の魔縁という言葉は惡魔が近づくものになる縁、または人の心を迷わせて、修業や學問などの妨げをする惡魔をさすことばで、本来仏教的文脈に属する異界存在である。ところがここで注目すべきことは、大魔縁の活動舞台になる「日本国」という言葉で、日本国というのは、天皇(院)が支配している地域、天皇の政治的力の及ぶ圈内という意味で、政治的文脈の言葉だということである。したがって崇徳院は、本来であれば仏菩薩に対立する存在であるはずの大魔縁になることによって、後白河院の帝王の力に対抗し、日本国を支配してみせるぞと恫喝していることになる。この恫喝が當時の人々に違和感をおぼえさせないとするれば、このことは「大魔縁ノ仏・菩薩」という宗教的対立項を政治的文脈にスライドさせて「崇徳院ノ後白河院」という政治的対立の構造へと転化させていることを意味する。「大魔縁」という言葉は、「日本国(院)」という言葉と対立軸を形成することによって、政治的な意味をもつようになったのである。しかも王法に対立・並列する仏法の語彙であるところから、王法にとってはまさに「外部的存在」である「大魔縁」という存在自体が、帝王に対抗する

「外部」の力を意味するのである。それはまさに保元の亂の歴史的動因たる「内部」と「外部」の二元的構造に照応しているといつてよからう。こうして「大魔縁」になることによって崇徳院は、天皇(院)が支配している日本国を滅ぼそうとする「反王法的な存在」になったといえる。「日本国ヲ滅ス大魔縁」という言葉こそ反王法的な存在としての崇徳院の怨霊の特性を浮かび上がらせている。この特性が『平家物語』の世界を動揺させてゆくのである。

崇徳院の怨念がもはや後白河院という個人に向けられているのではなく、「日本国」全体に向けられているということは、延慶本の先の引用のところや『百鍊抄』にみえる人々の不安につながるものである。では、崇徳院や頼長の怨霊がどういう形で国政を亂し人々を不安に陥れるのか、その答えが治承三年のクーデター叙述にみえる。治承三年十一月、清盛は大政大臣藤原師長を始めとして四十余人を解官し、後白河院を鳥羽殿に幽閉するなど、後白河院の院政に真っ向から対抗する処置をとるが、延慶本はこのような清盛の行動を「天魔外道ノ、入道ノ身ニ人替ニケルヨトゾミヘケル」と批判し、ある人の夢を紹介している。その夢の内容は、崇徳院が保元の亂の敗者たちを率いて後白河院の御所に入ろうとしたが、院は仏道修行の真っ最中だったので院の御所には入ることができず、清盛の邸に入ったということである。つまり崇徳院や頼長の怨霊らは後白河院や清盛といった枢機の人物に入れ替わり、治承三年のクーデターのような大事件を惹き起こすことによって、世間を混乱に落とそうとしたというのである。

この夢では、崇徳院を頭目とする死霊たちが後白河院の御所には入ることができず、清盛の邸には入ることが出来たのは、信仰心の有無によるものだとしている。夢のなかに見られる仏道修行に励む後白河院像は、言うまでもなく「法皇御灌頂事」で住吉明神との天狗問答を通して、自分の「驕慢」を悔い改め、驕慢な心を捨てることによって「魔王ノ来ルベキ縁」、すなわち魔縁をなくそうとする後白河院像を引き受けているといえる。清盛の無信仰については、保元の乱を引用して若かった時にあった信仰心も朝恩に誇ることによってなくなってしまったと語っている。この夢話は「人ハ高モ賤モ、信ハ有ベキ事ナリ」という締めくくりのことばからわかるように、信仰心の有無に焦点が当てられているといえる。それとともに崇徳院の「大魔縁」という語自体が反王法といった政治的文脈とは無関係に仏法的な色合いを紡ぎ出していることに注目する必要がある。というのは、崇徳院説話から反仏法的な要素を見いだすことはむずかしいからである。むしろ「大魔縁」という言葉が崇徳院に反仏法的性格を引き寄せたというべきであり、そのことによってまたこのような説話をも形成するに至ったのではなからうか。

このような崇徳院の怨霊譚で強調されている反仏法的な性格や天下の乱れを引き起こす邪悪な存在としての側面は、従来の怨霊観では説明がつかない新しい観念であり、まさしく中世に跳梁する天狗の特徴でもある。中世の天狗は『今昔物語集』巻二〇の天竺から来た天狗のように反仏法的な存在であったが、次第に政争の敗北者である怨霊と結びついてゆく過程で体制を

おびやかす反王法的な存在になったといわれている<sup>19)</sup>。崇徳院怨霊が反王法的性格を原型としながらも、「大魔縁」という語自体が反仏法的性格を引き寄せたという本論文の解釈がそれとは逆転していることについてはすでに言及した。延慶本の崇徳院や頼長の怨霊は、生前の怨敵であった信西に祟りをなしたり、群行して歩いたりといった点では平安時代以来の怨霊観の痕跡を残しながらも、もう一方では周縁性と結びつくことで、中央の秩序を乱すといった反王法的な性格が強調されている。従来の血筋にこだわる怨霊から天狗的な怨霊に変わる過渡的な姿にこそ、慈円の怨霊観からは逸脱する『平家物語』の怨霊の観念が認められるといえる。

#### 四、建礼門院御産の記事

ここまでみてきたところで成親の怨霊譚に戻ろう。成親の怨霊を崇徳院や頼長の怨霊と比較してみると、成親の怨霊は経遠の娘や建礼門院に祟るなど怨敵の血筋に執着していて、むしろ従来の怨霊観を継承していることがわかる。ところで第一節でふれたように、延慶本の場合、崇徳院や頼長の怨霊も成親と一緒に建礼門院の着帯場面に現れていた。しかしその建礼門院が高倉天皇を生む出産の場面になると、成親と西光の怨霊だけが現れ、崇徳院と頼長の怨霊は見えなくなる。諸本の同じ箇所をみてみると、諸本のなかで建礼門院の着帯後崇徳院と頼長の怨霊が現れるのは、延慶本、長門本、語り系諸本だけである<sup>20)</sup>。語り系諸本の場合、鬼界島の流人の赦免と崇徳院の御追号、頼長



の贈官贈位を平家側による一連の慰撫行事として描いているので、崇徳院と頼長が建礼門院の御産に現れないのはそれなりの整合性をもっているといえる。では延慶本や長門本の場合、御産の記事に保元の乱の敗者たちが現れなかった理由は何だろうか。それを考えるためにまずは成親等の怨霊が調伏され、建礼門院が安産する場合をみてみよう。

其時法皇御帳近ク居ヨラセオハシマシテ、仰ノ有ケルハ、  
「何ナル惡靈ナリトモ、此ノ老法師カクテ候ワムニハ、争  
カ近付奉ベキ。何況ヤ、顚ル、所ノ怨靈共、皆丸方朝恩ニ  
ヨリテ、人トナリシ輩ニハ非ズヤ。縦ヒ報謝ノ心ヲコソ存  
ゼザラメ、豈ニ障礙ヲ成ムヤ。其事不可然。速ニ罷り退キ  
候ヘ」トテ、「女人臨難生産時、邪魔遮障苦難忍、心称誦  
大悲呪、鬼神退散安樂生」トテ、御念珠ヲサラ／＼トオシ  
モマセオワシマシケレバ、御産ヤス／＼トナリニケリ。

(二四九―二五〇頁)

鹿谷陰謀に加担し、清盛によって殺された成親等にとつては、建礼門院は怨敵の娘であり、出産という生死の境界の場合は、怨霊出現にとつてはもつてこいの条件である。しかし建礼門院には高倉天皇の中宮であり、今まさに次代の天皇を生もうとしているというもう一つの面がある。私的な恨みによってそれを邪魔しようとしている成親等の怨霊はまさに王法を乱す悪霊ではない。それゆえに後白河院は成親等の怨霊を調伏し安産を導こうとしているのである。

上の引用で注目したいことは、他ならぬ後白河院によって怨霊等が調伏されたということである。出産に現れる怨霊を験者や祈禱師などが必死に調伏しようとすることは、たとえば『紫式部日記』などにも窺われる王朝に一般的なことである。『平家物語』にも建礼門院御産の時、四十一ヶ所の神社や七十四ヶ所の寺で中宮の安産を祈る祈禱や読経が行われる一方で、たくさん験者が西八条に集まり、様々な修法を行い安産を導こうとしたことが詳細に書かれている。出産が近づき、必死に怨霊を調伏しようとする験者たちの騒ぎの中で、後白河院の祈禱が行われることになる。まさに後白河院の怨霊調伏は御産記事のクライマックスをなしているのである。

しかし法皇自身が験者のように祈禱を行い怨霊を調伏することとは、「前代モ不聞、後代ニモ有カタカルベシ」という本文からわかるように、珍しいことである。この出産に後白河院が直接験者の役をつとめなければならなかった理由は何だろうか。久保勇は「法皇御灌頂」記事の分析の延長で御産についてふれ、「即身菩提ノ聖ノ御門」としての後白河院像を強調している<sup>11)</sup>。

しかし氏も語っているように、これは祈禱というより説得としての印象が強いことも事実であろう。御産の記事では、「顚ル、所ノ怨靈共、皆丸方朝恩ニヨリテ、人トナリシ輩ニハ非ズヤ」という調伏の論理、つまり「即身菩提ノ聖ノ御門」としての後白河院の仏力ではなく、むしろ帝王としての力を読みとるべきではなからうか。延慶本は皇統の守護のために、かつての近臣であった人々の霊を帝王の力によって調伏し、かつ帝王みずから建礼門院の安産を導いたのである。そのような場面の分析か

らその背後に目を配れば崇徳院と頼長の怨霊が現れなかったということは、かれらは帝王の力といえども圧倒することができない存在であることをうかがわせているといえる。

成親の怨霊はいかにも簡単に後白河院によって調伏されてしまった。成親の怨霊の無力さは、清盛との関係でも現れる。福原遷都後、清盛の前に血まみれの生頭や曝された頭などが現れ、成親や俊寛の苦しみを訴えることに對して、清盛は次のように答える。

〔汝等、官位ト云、俸禄ト云、随分入道ガ口上ニテ人トナリシ者共ニ非乎。無故君ヲ奉勸、入道ガ一門ヲ失ハムトスル科、諸天善神之擁護ヲ背クニ非乎。自科ヲ不顧、入道ヲ浦見ン事、スベテ道理ニ非ズ。速カニ罷出ヨ〕トテ、ハタト睨ヘテヲハシケレバ、霜雪ナドノ様ニ消失ニケリ。

(四二四頁)

清盛に對する恨みを各々言っている怨霊等にたいして、清盛は「入道ガ口上ニテ人トナリシ者共」であることを強調することによって、怨霊等を退治する。成親の怨霊も清盛という枢機の人物の威勢に圧倒され雪のように消えてしまったのである。これらの記事のなかの成親の怨霊は後白河院や清盛といった帝王や時の権勢者の力によってたやすく調伏されてしまう存在にすぎないということである。このことは成親の怨霊が『平家物語』の世界を揺るがすほどの力をもっていないことを意味しているといえる。

ここで備中有木別所という辺鄙なところで非業の死を遂げた成親が、強力な怨念をもち、死後すぐ怨霊になって現れ、経遠の娘たちを狂わせ殺したことをもう一度思い出す必要がある。経遠の娘を殺す怨霊の威力は、鹿谷陰謀の主謀者としての性格の反映でもあり、以後怨霊譚を導く原動力にもなったといえる。しかし御産や福原遷都後の清盛との対面のなかでの成親の怨霊にはその力が見えなく、いかにも氣迫に欠けている。むしろ怨霊譚を引き受けている崇徳院・頼長の方が、治承三年のクーデターを引き起こすことによって『平家物語』の世界を揺るがす怨霊として働きかけているのである。〈冥〉の世界において成親の怨霊の役割は、物語の展開につれて段々縮小・矮小化されてしまったといえる。

#### 四、むすびに

本稿では、成親の怨霊譚を中心に成親の人物造型の特徴について考察した。鹿谷陰謀を主導的に計画することによって、栄華を極めた平家の滅びという序章以来の主題に大きく関わった成親は、死後怨霊になって物語に再登場する。成親の怨霊化は、鹿谷陰謀発覚後の家族との哀話や清盛の無慈悲な処置の強調などをとおしてある程度予見されたものであった。成親の怨霊は経遠の娘たちを狂わせ殺し、建礼門院に祟りをなそうとするなど、備中有木別所から中央に向かうことになる。しかし成親の怨霊は、経遠の娘や清盛の娘といった形で、あくまでも怨敵の血筋に拘泥されるという点で、従来の怨霊觀を継承していると

いえる。

建礼門院の御産を妨害しようした成親の怨霊は、後白河院という帝王の力に調伏されてしまい、また清盛との対面でも清盛の威勢に圧倒され、雪のように消えてしまう。後白河院や清盛の前での成親の怨霊は、もはや経遠の娘たちを殺す時の勢いは感じられなくなり、ついには後白河院や清盛によってあえなくも物語から姿を消すことになる。

ところで成親の死から始まった怨霊譚を内容的に引き受けて登場した崇徳院や頼長の怨霊譚は、従来の怨霊観の痕跡を残しながらも、既存の怨霊観からはみ出す新しい怨霊のあり方を見せてくれる。つまり血筋にこだわることなく、「日本国」を滅ぼそうとする反王法的な存在としての崇徳院や頼長の造型がそれである。崇徳院や頼長の怨霊は、『保元物語』の世界から復活し、『平家物語』始発部の主役たる清盛の邸に群行して乱入し、治承三年のクーデターを引き起こし、天下の乱れを引き起こすことによって『平家物語』の世界を揺るがすことになる。

鹿谷陰謀の主謀者として〈顕〉の世界では重要な役割を果たしている成親が、怨霊譚を引き出す契機にはなったものの、崇徳院・頼長の保元の乱の敗者の怨霊等に影が薄くなり、〈冥〉の世界においては『平家物語』の構想に関わる重要な役割を果たさず、後白河院の帝王の力に調伏され、実質的には物語から姿を消してしまうことになった。成親の怨霊は、〈冥〉においては、『平家物語』をゆるがすほどの怨霊にはなることができなかつたといえる。〈冥〉においての成親のこのような造型には、〈顕〉においての成親造型の特徴と関わる点が多いが、それに

ついては前にもふれたように「延慶本『平家物語』の成親説話考(下)」で考察したいと考えている。

### 【注】

本文中に引用した『平家物語』のテキストは、『延慶本平家物語』（北原保雄・小川栄一編、勉誠社、一九九〇）によった。

(1) 院政期には家格が形成されていて、基本的には摂関家や清華家の子弟でなければ、いくら公卿に列していても大將の候補になることはできない。(曾我良成「安元三年の近衛大將人事」『平家物語』と古記録のはざま―(『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』第32巻第1号、一九九五年七月) 四頁)。

(2) 氏は、成親の私怨と以仁王の挙兵の際の頼政父子の私怨との共通性を指摘し、さらに頼朝の挙兵との比較を通して、朝憲を軽んじた平家は朝家の命を受けた源氏によって討伐されるという一種のイデオロギーが隠されていると捉えている。(早川厚一「平家物語」の歴史観―(『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』第32巻第1号、一九九五年七月) 四五―四六頁)。

(3) 春田宣「平家物語に見える怨霊」(『国語と国文学』、一九八三年二月) 一頁。

(4) 砂川博「平家物語新考」(『東京美術』、一九八二年)。

(5) 長岡英明「『平家物語』成親説話考―成親説話を含めて―」(『軍記と語り物』、一九八三年三月、一〇頁)。

(6) 岡見正雄、赤松俊雄校注『愚管抄』(『日本古典文学大系』86、岩波書店、一九六七) 三三九頁。

(7) 廿九日。讃岐院奉号崇徳院。宇治左府贈官位太政大臣正一位事宣下。天下不静。依有彼怨霊也。

(8) 「大魔縁」という仏教語は、文脈の対立構造のなかで政治的な意味をもつ。このような現象は、文覚の言説(『第六末』十九 六代の御前被免給事)にも見える。文覚は六代の命を救うために頼朝に嘆願するが、その際、もし自分の申し出を聞き入れてくれなければ、

「大魔縁」になつて頼朝の政權を危機に陥れると恫喝する（聖ガ心ヲ破テハ、二位殿争カ冥加モオワスベキ。若此事聞給ワズハ、ヤガテ大魔縁ト成テ恨申ムズル）。「大魔縁」になつて頼朝政權に對抗するという発想は、崇徳院が「大魔縁」になつて日本国を滅ぼすと宣言したのと、まさに同じ発想だといえる。

(9) 小峰和明『説話の森』（大修館書店、一九九一）三七頁。

(10) 手元の資料で、高野本、屋代本、平松本、中院本、流布本、鎌倉本、百二十句本は確認をした。

(11) 久保勇「延慶本『平家物語』における後白河院関係記事についての一試論——「法皇御灌頂事」を基軸として——」（『語文論叢』、一九九六）十九頁

(パク ウンヒ 筑波大学大学院 博士課程 文芸・言語研究  
文学)